

令和6年11月19日

千葉県農林総合研究センター長

I 向こう1か月間の予報

発生量及び発生時期は平年との比較で表す。予想発生量は「多」「やや多」「並」「やや少」「少」で表している。予報の根拠の(+)は多発要因、(-)は少発要因であることを示す。また、【 】内の数値は左側が10月下旬～11月上旬の発生予察調査のデータ、右側が平年値(過去10年の平均値)を示す。

なお、「並」とは平年値を中心にして40%の度数に入る幅、「やや多」「やや少」は「並」の外側20%の度数に入る幅、「多」「少」は上記3者の外側10%の度数に入る幅である。

また、下表の病害虫を防除する場合は、「千葉県総合防除計画」の該当ページ(※)の「総合防除の内容」を参照するとともに、3ページの「2 個々の病害虫に関する防除上の注意事項」も参考とすること。

千葉県総合防除計画(令和6年3月版)



作物名	病害虫名	予想発生量	予報の根拠 (10月下旬～11月上旬の発生予察結果及び気象予報等)	※
冬 春 キ ュ ウ リ	うどんこ病	少	発病葉率：少【1.20%/12.09%】(-) 気象予報：日照時間並か少(+)	37
	褐斑病	並	発病葉率：並【0.00%/0.02%】 気象予報：日照時間並か少(+)	38
	べと病	やや少	発病葉率：やや少【0.00%/1.30%】(-) 気象予報：日照時間並か少(+)	39
	オンシツコナジラミ	少	成虫寄生株率(オンシツコナジラミ)：少【0.00%/4.78%】(-) 成虫寄生株率(タバココナジラミ)：	40
	タバココナジラミ	やや多	やや多【20.80%/5.64%】(+) 気象予報：降水量並	
冬 キ ャ ベ ツ	黒腐病	多	発病度：多【11.2/0.4】(+) 気象予報：気温高(+) 降水量並 日照時間並か少(+)	36
	菌核病	やや多	本年4月発病株率：やや多【4.00%/1.78%】(+) 発病株率：並【0.00%/0.00%】 気象予報：気温高(+) 降水量並 日照時間並か少(+)	36
秋 冬 ネ ギ	さび病	並	発病度：並【0.00/0.14】 気象予報：気温高(+) 降水量並	34
	べと病	並	発病株率：並【0.00%/0.16%】 気象予報：気温高(+) 降水量並	34
	ネギアザミウマ	やや多	成幼虫寄生株率：並【34.80%/34.96%】 気象予報：気温高(+) 降水量並	34
	ネギハモグリバエ	やや多	被害度：並【3.30/5.68】 気象予報：気温高(+) 降水量並	35

作物名	病害虫名	予想発生量	予報の根拠 (10月下旬～11月上旬の発生予察結果及び気象予報等)	※
冬レタス	菌核病	並	発病株率：並【0.00%/0.00%】 気象予報：気温高（+）降水量並	41
	灰色かび病	並	発病株率：並【0.00%/0.00%】 気象予報：気温高（+）降水量並	42
イチゴ	うどんこ病	やや少	発病株率：やや少【1.60%/4.62%】（-） 気象予報：日照時間並か少（+）	42
	灰色かび病	並	発病株率：並【0.00%/0.00%】 気象予報：日照時間並か少（+）	43
	アブラムシ類	並	成幼虫寄生株率：やや少【2.93%/4.40%】（-） 気象予報：気温高（+）降水量並	44
	ハダニ類	少	成虫寄生株率：少【2.13%/11.90%】（-） 気象予報：日照時間並か少（-）	45
カーネーション	アザミウマ類	やや多	成幼虫寄生株率：並【0.00%/0.76%】 10月黄色粘着トラップ誘殺数：多【12.38頭/6.56頭】（+） 気象予報：気温高（+）降水量並	-
	ハダニ類	並	成虫寄生株率：並【0.80%/5.50%】 気象予報：日照時間並か少（-）	-
野菜・花き共通	コナガ	並	10月フェロモントラップ誘殺数：少【0.29頭/1.06頭】（-） 10株当たり寄生幼虫蛹数（冬キャベツ）：並【0.00頭/0.02頭】 被害株率（施設ストック）：多【4.00%/1.42%】（+） "（露地ストック）：並【3.00%/5.63%】 気象予報：気温高（+）降水量並	45
	ハスモンヨトウ	やや多	10月フェロモントラップ誘殺数：やや多【39.30頭/31.56頭】（+） 被害株率（秋冬ネギ）：並【0.00%/0.28%】 幼虫寄生株率（カーネーション）：並【0.00%/0.08%】 "（夏秋トマト）：並【0.00%/0.20%】 "（イチゴ）：やや多【3.47%/1.20%】（+） "（冬春キュウリ）：並【0.00%/0.00%】 "（冬キャベツ）：並【0.00%/0.00%】 "（冬レタス）：多【0.40%/0.00%】（+） 気象予報：気温高（+）降水量並	46
	シロイチモジヨトウ	多	10月フェロモントラップ誘殺数：多【7.32頭/1.88頭】（+） 被害株率（秋冬ネギ）：多【16.80%/1.60%】（+） 幼虫寄生株率（カーネーション）：並【0.00%/0.08%】 気象予報：気温高（+）降水量並	46

* 1 フェロモントラップ誘殺数：1日当たりの誘殺数

1 防除に関する措置（共通）

- (1) 病害虫は早期発見に努め、発生初期から薬剤防除する。
- (2) 発病株及び罹病部位は、ほ場外へ持ち出し適切に処分する。
- (3) 害虫の薬剤抵抗性の発達や耐性菌の発生を防ぐため、同系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布を行う。
- (4) 病害虫の発生を予防するため、温湿度管理、防虫網の設置、周辺雑草の除草、輪作や緑肥作物の栽培等の耕種的防除及び物理的防除に努める。

2 個々の病害虫に関する防除上の注意事項

(1) 黒腐病（キャベツ）

令和6年度病害虫発生情報第2号「キャベツ黒腐病の発生状況について」も参照する。



(2) 灰色かび病（野菜・花き共通）

P4～5「これから注意を要する病害虫（灰色かび病）」も参照する。

(3) コナジラミ類（野菜・花き共通）

令和4年度病害虫発生予報第8号P4「これから注意を要する病害虫」も参照する。



(4) ハスモンヨトウ（野菜・花き共通）

今年の気温は平年より高いことから、今後も露地作物への被害が続くことが予想される。また、晩秋となり、屋外より温暖である施設への飛び込みによる被害も懸念される。いずれも、ほ場をよく観察して、発生初期からの防除を心掛ける。



また、令和6年度病害虫発生予報第7号P4～5「これから注意を要する病害虫」も参照する。

(5) シロイチモジヨトウ（野菜・花き共通）

令和6年度病害虫発生予察注意報第4号「シロイチモジヨトウによるネギの食害に注意」も参照する。



Ⅱ これから注意を要する病害虫

灰色かび病

灰色かび病菌は、トマト、レタス、キュウリ、イチゴ、シクラメン、カーネーションなど、多くの作物に感染する。灰色かび病菌の生育温度は2～31℃、適温は23℃前後である。分生子は多湿条件で発芽する。枯死した花卉や葉先枯れ部から感染する（写真1）場合が多い。好適条件が続くと菌糸を発達させて、二次伝染源となる。

施設栽培の冬春作型では、夜温の上昇に伴って暖房機の稼働時間が減少し、施設内の相対湿度が高くなりやすい3月頃に発病が増加する。

露地レタスのトンネル栽培では夜間の相対湿度が上がりやすいトンネル被覆後に発病が増加する。

11月14日に発表された気象庁の1か月予報によると、関東甲信地方の日照時間は平年並か少ない、降水量はほぼ平年並、気温は高い見込みであることから、曇雨天が続く場合や、夜温が暖房設定温度より高く、暖房機が稼働しない場合等による多湿に注意が必要である。

<主な発生部位と症状および伝染形態>

枯れた下葉や葉先、摘葉・摘芽後の傷口、開花後の花卉、雌ずい等から発生する。その後、健全な部位に広がり、感染した場所を中心とする茶色の輪紋状病斑となることがある。葉や枝に落下した花卉から発生し、接触する茎葉に伝染する（写真2）ことも多い。

病患部には、灰色のカビが密生し、軟らかく腐る。茎や葉柄に発生した場合は、病患部より先は萎れて枯死する。トマト果実の表面には、「ゴーストスポット」と呼ばれる直径1～2mmで白色円形の斑点を生じる（写真3）。

露地レタスのトンネル栽培では、老化葉や凍霜害の被害葉があると発病（写真4）が多くなる。

出荷調製中や、出荷先で発病することもある。

伝染源は、被害残さや有機物に腐生的に生存する菌糸である。菌核の形で土壌中にも生存する。



写真1 キュウリ花卉（左）及びトマト葉先（右）から感染した灰色かび病



写真2 病患部（花卉）の接触により伝染したキュウリの灰色かび病



写真3 トマト果実のゴーストスポット



写真4 レタスの灰色かび病

<防除対策>

1 耕種的・物理的防除

- (1) 群落内の風通しを良くし多湿を避ける。施設では、暖房機の積極的な稼働や、全面ポリマルチ・換気等によって湿度を下げる。降雨等で地下水位が例年より高いほ場では特に注意する。
- (2) 施設内での送風は、発生前の予防には有効である。しかし、発生後は分生子（カビ）の飛散を助長し、感染をまん延させてしまうので注意する。
- (3) 傷口が早く乾くよう、管理作業は晴天が続く時に行う。摘葉や摘芽は基部で切断する。
- (4) 発病していなくても、しぼんだ花卉や枯死した部位は発生源となるため、摘除する。
- (5) 病患部は早めに摘除し、ほ場外に持ち出して土中に埋め込む。
- (6) 訪花昆虫を使用しない栽培では、紫外線除去フィルムを展張すると、分生子の発芽が抑制されるため発生が少なくなる。
- (7) レタスのトンネル栽培では、トンネル内が多湿にならないよう、日中は換気を十分に行う。
- (8) レタスのトンネル栽培では、老化葉や凍霜害の被害葉は早めに除去する。

2 化学的防除

- (1) 古葉や発病部位をできる限り除去し、葉裏や下位葉にも十分かかるよう、丁寧に農薬散布する。
- (2) 多湿にならないよう、散布薬液が速やかに乾く時間までに散布作業を完了させる。
- (3) 耐性菌を生じやすいので、FRACコードが異なる薬剤をローテーションで選択する。

Ⅲ その他情報

果樹チョウ目（シンクイムシ類・ハマキムシ類）の防除対策が必要です

本年は、夏以降の気温が平年より高めに推移していることから、10月のシンクイムシ類・ハマキムシ類の誘殺が多い（図1～4）。10月のフェロモントラップ調査による1日当たりの誘殺数は、ナシヒメシンクイが2.71頭（平年値：0.67頭）、モモシンクイガが0.01頭（平年値：0.001頭）、チャハマキが3.53頭（平年値：1.17頭）、チャノコカクモンハマキが8.23頭（平年値：3.29頭）で、いずれも「多」の発生であった。

10月はハスモンヨトウを含むチョウ目害虫による「ナシ」の葉の食害が目立ったが、すでに終齢幼虫で薬剤の効果が期待できないことや、まもなく落葉することから、積極的な「秋防除（殺虫剤散布）」は不要である。しかし、越冬する幼虫・蛹が多く、来春は多発生が予想されることから、冬期からそれぞれの害虫の生態に応じた防除をする必要がある。

<シンクイムシ類の生態等>

1 ナシヒメシンクイ

老齢幼虫が枝幹の粗皮の割れ目等に繭を作り越冬する。越冬世代の成虫は4月頃に羽化し始め、ウメ等に産卵し、ふ化した幼虫（第1世代）は枝先に食入する。第1世代成虫がナシ果実に産卵し、ふ化した幼虫（第2世代）は、果実内に食入し、果実中心部を食害する。

成虫の生存期間は5～12日で、その間に産卵を行い、年4回発生する。6月は幼虫が揃って発生するため、この時期に確実な防除を行い、収穫時期の発生と被害を防ぐ。

ナシヒメシンクイの前年秋や本年4月の誘殺数は多く、前作の越冬数が多かったと推察された。本年は春先から各産地で果実の食害等が散見されたが、それを上回る発生となることが懸念される。

2 モモシンクイガ

越冬は、老齢幼虫が浅い土中に扁平な球形の冬繭をつくりその中で行う。5月頃、冬繭を脱出した幼虫は成虫となり、果実に産卵し、ふ化幼虫は果実を食害する。成虫は連続的に発生し、産卵が続くため、定期的な薬剤散布が有効である。

本虫は、未発生国・地域の多くが侵入を警戒している。本県ナシの有望な輸出先である台湾においては、台湾側の生果実の輸入検査で本虫が発見された場合、輸出年度ごとに、発見1回目は当該果実が生産された都道府県からの全ての生果実、発見2回目で全都道府県からの全ての生果実の輸出が停止となる。このため、ナシの輸出に取り組む産地では、特に警戒が必要である。

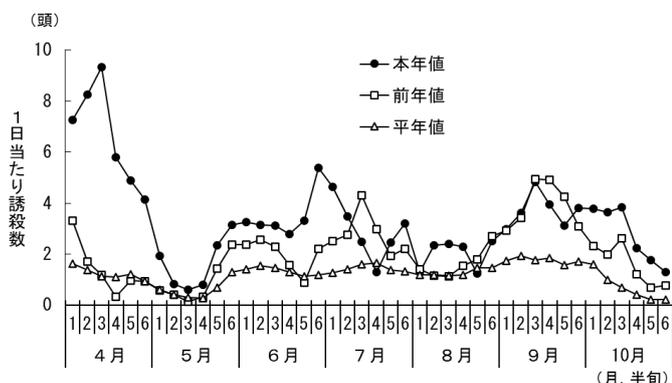


図1 ナシヒメシンクイのフェロモントラップ誘殺数の推移（県内4地点の平均）

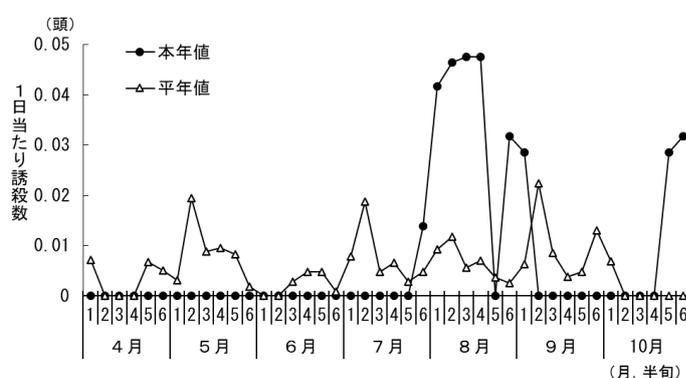


図2 モモシンクイガのフェロモントラップ誘殺数の推移（県内4地点の平均）

<ハマキムシ類の生態>

チャハマキは年4～5回、チャノコカクモンハマキは年4回発生する。いずれも、幼虫で越冬し、翌春、4～5月に越冬世代成虫がナシ園に飛来、産卵するため、5月以降の第1世代の幼虫から増加する。

越冬世代と第1世代の発生量には高い相関関係があるとされていることから、来春の発生量が多くなる可能性がある。

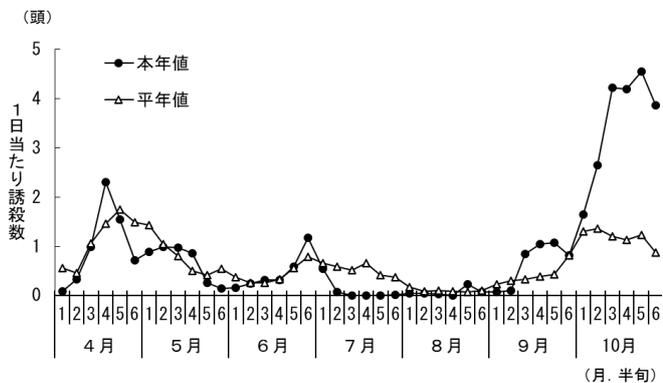


図3 チャハマキのフェロモントラップ誘殺数の推移
(県内4地点の平均)

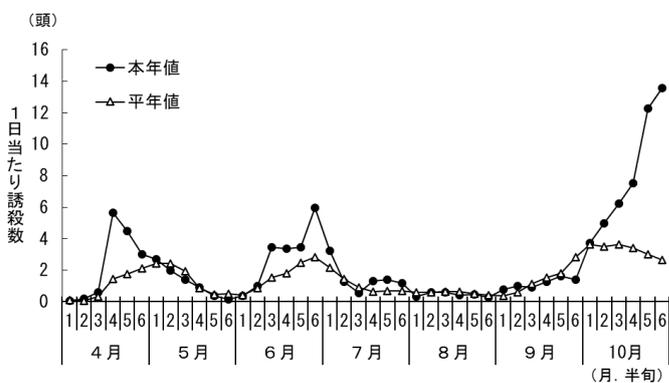


図4 チャノコカクモンハマキのフェロモントラップ
誘殺数の推移 (県内4地点の平均)

<防除対策>

- 1 シンクイムシ類の越冬量を少なくするため、冬期に粗皮を削り、削った粗皮を回収する。また、冬期に表土を耕起し、冬繭を死滅させる。
- 2 性フェロモン剤を防除暦に従って設置し、「交信かく乱法」により交尾率を下げ、産卵数を減少させる。なお、産地全体で設置すると、より効果が高くなる。
- 3 断続的に発生するが、幼虫の発生が揃う5～6月に確実な薬剤防除を行い、収穫時期の発生と被害を防ぐ。薬剤散布は、10a当たり300リットルを目安に十分な量を丁寧に散布し、かけむらのないようにする。また、薬剤抵抗性の発達を避けるため、I R A Cコードが異なる薬剤をローテーションで選択する。
- 4 シンクイムシ類の被害果は、幼虫が果実から脱出する前に摘除し、速やかに水中に1週間以上浸漬するか、土中深くに埋却する等、適切に処分する。

○主要病害虫の発生状況

巡回調査結果（野菜：10月下旬～11月上旬、花き：10月下旬）

作物名 (調査地域)	病害虫名	調査項目	調査結果			備考	
			本年値	平年値	前年値		
夏秋トマト (山武)	灰色かび病	発病株率 (%)	7.00	8.28	0.00	頭/30日 頭/30日	
		発病果率 (%)	0.00	0.09	0.00		
		果実発病度	0.00	0.70	0.00		
	すすかび病	発病株率 (%)	85.00	65.07	60.00		
		黄化葉巻病	発病株率 (%)	43.00	6.23		5.50
		アブラムシ類	成虫寄生株率 (%)	0.00	0.00		0.00
	オンシツコナジラミ	成虫寄生株率 (%)	5.00	19.40	6.00		
	タバココナジラミ	成虫寄生株率 (%)	29.00	7.26	11.00		
	ハスモンヨトウ	幼虫寄生株率 (%)	0.00	0.20	2.00		
	ハモグリバエ類	幼虫寄生株率 (%)	1.00	2.50	0.00		
	アザミウマ類	成幼虫寄生株率 (%)	0.00	4.58	0.00		
	コナジラミ類	黄色粘着トラップ誘殺数	248.61	427.03	0.00		
アザミウマ類	黄色粘着トラップ誘殺数	4.44	31.85	0.00			
冬春キュウリ (山武)	うどんこ病	発病葉率 (%)	1.20	12.09	1.20		
		褐斑病	発病葉率 (%)	0.00	0.02	0.00	
	べと病	発病葉率 (%)	0.00	1.30	2.00		
	アブラムシ類	成幼虫寄生株率 (%)	0.00	0.09	0.00		
	ワタヘリクロノメイガ	幼虫寄生株率 (%)	0.00	0.00	0.00		
	オンシツコナジラミ	成虫寄生株率 (%)	0.00	4.78	0.80		
	タバココナジラミ	成虫寄生株率 (%)	20.80	5.64	2.40		
	ハスモンヨトウ	幼虫寄生株率 (%)	0.00	0.00	0.00		
冬キャベツ (海匝)	黒腐病	発病度	11.20	0.40	0.40		
	菌核病	発病株率 (%)	0.00	0.00	0.00		
	コナガ	10株当たり寄生幼虫蛹数	0.00	0.02	0.00		
	ハスモンヨトウ	幼虫寄生株率 (%)	0.00	0.00	0.00		
秋冬ネギ (山武、長生)	黒斑病	発病度	0.00	3.51	0.00		
	さび病	発病度	0.00	0.14	0.00		
	べと病	発病株率 (%)	0.00	0.16	0.00		
	ネギアザミウマ	被害度	18.40	22.61	8.00		
		成幼虫寄生株率 (%)	34.80	34.96	12.00		
	ネギアブラムシ	成幼虫寄生株率 (%)	0.00	0.76	0.80		
	ハスモンヨトウ	被害株率 (%)	0.00	0.28	0.00		
	シロイチモジヨトウ	被害株率 (%)	16.80	1.60	8.40		
	ネギコガ	被害株率 (%)	0.00	0.12	0.40		
	ネギハモグリバエ	被害度	3.30	5.68	5.30		
冬レタス (安房、君津)	灰色かび病	発病株率 (%)	0.00	0.00	0.00		
	菌核病	発病株率 (%)	0.00	0.00	0.00		
	腐敗病	発病株率 (%)	0.00	0.00	0.00		
	ネキリムシ類	被害株率 (%)	0.00	0.00	0.00		
	アブラムシ類	成幼虫寄生株率 (%)	0.40	0.30	0.00		
	ハスモンヨトウ	幼虫寄生株率 (%)	0.40	0.00	0.00		
イチゴ (山武、海匝、安房)	うどんこ病	発病株率 (%)	1.60	4.62	2.75		
	炭そ病	発病株率 (%)	2.93	0.15	0.25		
	灰色かび病	発病株率 (%)	0.00	0.00	0.00		
	アブラムシ類	成幼虫寄生株率 (%)	2.93	4.40	4.25		
	ハスモンヨトウ	幼虫寄生株率 (%)	3.47	1.20	0.00		
	ハダニ類	成虫寄生株率 (%)	2.13	11.90	3.00		
ナシ (県内全域)	黒星病 (秋型病斑)	発病葉率 (%)	3.21	1.63	2.74		
	うどんこ病	発病度	1.18	3.43	2.21		
温州ミカン (安房)	そうか病	果実発病度	0.00	0.09	0.04		
	かいよう病	果実発病度	0.00	0.00	0.00		
	黒点病	果実発病度	0.00	5.21	1.76		
	ヤノネカイガラムシ	成幼虫寄生果率 (%)	0.00	0.00	0.00		
	ミカンハダニ	成虫寄生葉率 (%)	14.80	6.80	22.00		
	アブラムシ類	成幼虫寄生新梢率 (%)	0.00	0.28	0.00		
	ミカンハモグリガ	幼虫寄生葉率 (%)	0.00	0.24	0.00		
	カメムシ類	被害果率 (%)	0.00	0.10	0.00		
	払落虫数	0.00	0.28	0.20			

作物名 (調査地域)	病害虫名	調査項目	調査結果			備考
			本年値	平年値	前年値	
ビワ (安房)	灰斑病	発病葉率 (%)	1.25	3.69	8.50	
	アブラムシ類	成幼虫寄生葉率 (%)	0.00	0.00	0.00	
	カミキリムシ類	被害穴数	0.00	0.50	0.00	
カーネーション (安房)	立枯病	発病株率 (%)	0.00	0.76	0.00	頭/30日
	萎凋症	発病株率 (%)	0.00	0.32	0.00	
	アザミウマ類	被害株率 (%)	0.00	14.70	7.20	
	アザミウマ類	黄色粘着トラップ誘殺数	12.38	6.56	6.39	
	オオタバコガ	幼虫寄生株率 (%)	0.80	0.56	1.60	
	シロイチモジヨトウ	幼虫寄生株率 (%)	0.00	0.08	0.00	
	ハスモンヨトウ	幼虫寄生株率 (%)	0.00	0.08	0.00	
	ヨトウムシ類	被害株率 (%)	0.00	2.48	0.00	
ストック (安房)	ハダニ類	成虫寄生株率 (%)	0.80	5.50	0.00	
	菌核病 (施設)	発病株率 (%)	0.00	0.00	0.00	
	菌核病 (露地)	発病株率 (%)	0.00	0.00	0.00	
	萎凋病 (施設)	発病度	0.00	-	-	
	萎凋病 (露地)	発病度	0.00	-	-	
	コナガ (施設)	被害株率 (%)	4.00	1.42	0.80	
	コナガ (施設)	幼虫寄生株率 (%)	0.00	0.24	0.80	
	コナガ (露地)	被害株率 (%)	3.00	5.63	0.00	
	コナガ (露地)	幼虫寄生株率 (%)	0.00	1.13	0.00	
	アブラムシ類 (施設)	成幼虫寄生株率 (%)	0.00	0.16	0.00	
アブラムシ類 (露地)	成幼虫寄生株率 (%)	0.00	2.83	0.00		

* 黄色粘着トラップ誘殺数は調査日数を30日に換算した値

トラップ月間誘殺数 (10月) * 種類別の単位の違いに注意

区分	調査害虫名	トラップ設置場所	誘殺数			備考
			本年値	平年値	前年値	
果樹予察灯	チャバネアオカメムシ	安房	1.9	5.0	0.0	頭/月
	クサギカメムシ	"	0.0	1.1	0.0	
	ツヤアオカメムシ	"	2.9	8.5	1.0	
性フェロモン	ドウガネブイブイ	印旛、香取	0.10	0.18	0.05	頭/日
	ヒメコガネ	印旛、香取	0.00	0.00	0.00	
	コナガ	海匠、安房	0.29	1.06	0.78	
	ハスモンヨトウ	県内全域	39.30	31.56	30.38	
	シロイチモジヨトウ	県内全域	7.32	1.88	4.92	
	オオタバコガ	県内全域	4.40	3.64	7.12	
	タバコガ	県内全域	0.93	0.64	1.04	
	ナシヒメシンクイ	東葛飾、印旛	2.71	0.67	1.57	
	モモシンクイガ	東葛飾、印旛	0.01	0.00	0.00	
	シンクイムシ類	東葛飾、印旛	2.73	0.67	1.57	
	チャハマキ	東葛飾、印旛	3.53	1.17	1.19	
	チャノコカクモンハマキ	東葛飾、印旛	8.23	3.29	3.22	
ハマキムシ類	東葛飾、印旛	11.76	4.46	4.41		
チャバネアオカメムシ 集合フェロモン	チャバネアオカメムシ	県内全域	1.70	1.46	0.83	頭/日
	ツヤアオカメムシ	"	1.47	0.61	0.73	
	クサギカメムシ	"	0.50	0.40	0.42	
	カメムシ類	"	3.67	2.46	1.98	
	マルボシヒラタヤドリバエ (天敵)	"	0.58	0.19	0.17	

○気象予報

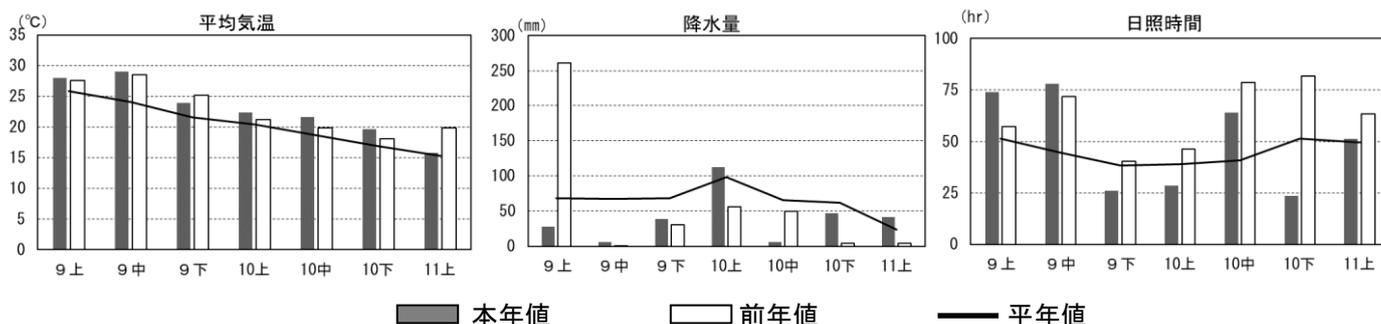
11月14日気象庁発表
関東甲信地方における向こう1か月間の確率(%)

要素	低い・少ない	平年並	高い・多い
気温	10	30	60
降水量	30	30	40
日照時間	40	40	20

出典：気象庁ホームページ

向こう1か月間の各気象要素の平年値
(11月16日～12月15日)

要素	千葉	銚子	館山
気温(°C)	10.9	11.9	11.2
降水量(mm)	80.7	124.2	125.1
日照時間(hr)	152.4	141.8	148.4



過去2か月の気象概況(アメダス千葉、銚子地方気象台提供)

農薬は適正に使用しましょう。無登録農薬の使用はできません。

- 農薬は、農薬取締法に基づいて、使用できる農作物の種類、適用病害虫、希釈倍数、収穫前日数、総使用回数などが定められています。
- 登録番号のない薬剤は、農薬として使用できません。登録農薬には必ず登録番号が記載されています(記載例 農林水産省登録第〇〇〇号)。
- 農薬はラベルをよく読んで適正に使用しましょう。
- 飛散しないよう工夫して散布しましょう。
- 農薬を使用したら必ず記帳するようにしましょう。
- タンクやホースは洗いもれがないようきれいに洗っておきましょう。

- ・ 病害虫発生予察情報はインターネットでもご覧いただけます。
<https://www.pref.chiba.lg.jp/lab-nourin/nourin/boujo/>
- ・ 次回の発行予定は12月17日です。
なお、注意報等の臨時情報は逐次発行されます。
- ・ 薬剤の選定については、最新の農薬登録情報を確認してください。
<https://pesticide.maff.go.jp/>



問合せ先

千葉県農林総合研究センター病害虫防除課

〒266-0014 千葉市緑区大金沢町180番地1

TEL 043(291)6077 FAX 043(226)9107

E-mail cafrc-bojo@mz.pref.chiba.lg.jp